

北代縄文通信

記念講演会「完全非破壊分析による石器石材分析の最前線 ～富山市小竹貝塚出土石器を中心に～」を開催しました

北代縄文館ミニ企画展「とやまの石器研究最前線！」(6/6～12/17)では、台湾の中央研究院地球科学研究所の飯塚義之博士による史跡北代遺跡・小竹貝塚出土石器の岩石学的同定結果報告(飯塚「ハンドヘルド蛍光X線分析装置を用いた石器石材分析の試み」『富山市の遺跡物語』第18号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2017年)の成果を紹介しました。その関連講座の一つとして、飯塚氏による講演会を平成29年11月18日に富山市立長岡公民館研修室で開催しました。当日は荒天のなか、40名の方々が聴講し、熱心に質問されていました。

東アジアや東南アジアの先史時代に広く用いられた岩石は、俗に「軟玉」と称されるネフライトですが、日本では利用されていたという認識がほとんどありません。飯塚氏はネフライトの地質学的な産地が限定的なことに着目し、中部日本では新潟県西部、長野県北部、岐阜県北部で採集したネフライトの化学分析を行いました。講演では、アジア規模でのネフライト製石器の様相や小竹貝塚出土石器の分析結果を説明された後、今後は日本列島の石器に用いられたネフライトがどこからもたらされたものであるかについての議論が進むだろうとの見通しを述べられました。講演会の後には、飯塚氏によるミニ企画展の展示解説会が行われました。



記念講演会



展示解説会

「文化の秋の縄文土器づくり」・「文化の秋の縄文土器づくり作品展 2017」を開催しました

文化の秋を満喫していただくため、10月に全4回講座で、5名の参加者が史跡北代遺跡出土品をモチーフとした実物大の有孔鏝付土器づくりに挑戦しました。じっくり観察して縄文人の造形を



第1回(成形、10/6)



第2回(研磨、10/12)



第3回(野焼き、10/31)



第4回(着色、11/1)

再現し、丁寧に磨き上げました。十分乾燥させて野焼きを行い、赤色顔料を塗布して当時の姿に迫りました。完成した作品は、北代縄文館での「縄文土器づくり作品展 2017」で展示しました(11/7~11/19)。



文化の秋の縄文土器づくり作品展 2017

北代縄文考古楽講座を開講しました

古気候や古地形など自然科学の最新の研究動向の紹介や動物考古学などに着目した今年度の北代縄文考古楽講座のまとめとして、12月16日に第4回講座「気候変動に直面した地域社会の応答」を開講しました。弥生時代のとやまを事例として、寒冷多雨等の気候変動にどのように対応したのかを考古学的に検討した結果を紹介し、これからの環境問題等を考えるきっかけにさせていただきました。



北代縄文考古楽講座 (第4回)

北代縄文館ミニ企画展「縄文人の食生活」を開催しています

5月27日までの予定で、12月19日からミニ企画展を開催しています。12月23日に開催した展示解説会では30名の参加がありました。

日本海側最大級の富山市小竹貝塚から出土した魚骨等(縄文時代前期)の分析から、遺跡を残した縄文人は旧放生津潟や周辺の河川に加え、富山湾に生息する魚類なども捕獲していたことがわかりました。また、小竹貝塚では、温帯・熱帯海域に生息する暖海性のサメ類であるシロワニの歯が確認されていることも注目されます。シロワニは現在、東シナ海に生息しており、日本海では生息が確認されていません。

これまでは主に貝類の分布の変化から縄文時代前期に地球規模で温暖化したことが指摘されてきましたが、小竹貝塚のシロワニからも当時の地球温暖化が示唆されるのです。このような最新の研究成果を紹介しているミニ企画展にぜひお越しください。



ミニ企画展「縄文人の食生活」



ミニ企画展の展示解説会

北代縄文広場ボランティアの会に新しい仲間が加わりました!

新しく仲間に加わった二人を紹介します。26名の会員が皆様のご来場をお待ちしております。

しまだよしかず

島田栄一(1936年生まれ)

北代縄文広場は私の日々の散歩コースの一辺にありました。富山市の広報等で月1回縄文土器の野焼きをしていることを知り、焼き物をしている関係もあって見学かたがた参加(平成28年春)したのが運の尽き、ボランティアのお誘いを受ける羽目となり、ずるずるとお付き合いさせてもらっています。あまりお役に立っていませんが、足腰が立つ限り、参加を楽しんでいきたいと思っています。



小林加津子（1952 年生まれ）

時間に余裕を持てるようになってから歴史に関心を持つようになり、自宅付近の北代縄文広場でボランティアの募集をしているのを知ってすぐに応募し、その活動に参加させていただくことになりました。研修で縄文土器づくりをしていくなかで、縄文人たちの知恵と技術の高さ、そして素晴らしい美的センスには大変驚かされました。4000年の時間を超えて縄文人の感性を間直に感じ、素朴な縄文の暮らしと魅力的な文化遺産に触れることができるのは楽しい時間です。

北代縄文広場を訪問される方々にも楽しい体験をしていただけるようお手伝いできればと思っておりますが、まだまだ知らないことも多く、先輩ボランティアの方々のご指導をいただければと思います。



富山市北代縄文広場ボランティアの会 平成 29 年度研修旅行記

あおられた太古への好奇心－桜町遺跡、チカモリ遺跡、御経塚遺跡を巡る旅－

島田 栄一

メンバー待望の研修旅行。今回は、11月17～18日に富山県小矢部市から石川県金沢市・野々市市・白山市等の遺跡や展示施設を巡る旅だった。参加者は女性4名、男性9名の計13名。縄文遺跡への好奇心に駆り立てられて、出発した。最初に訪れたのは、小矢部市の**桜町遺跡**である。この遺跡は昭和61～63年の発掘調査で縄文考古学に新しいページを開く大発見が相次ぎ、全国的に注目を集めた。なかでも高度な細工を施した高床式建物の柱材と考えられる木柱の発見は、高床式建物が出現するのは弥生時代に入ってからという従来の定説を覆した。

私たちはまず発掘現場に近接した地点に整備されている**桜町 JOMON パーク**へ立ち寄り、復原展示されている高床式建物（高さ6m）や環状木柱列などを見学した。ここでは、同遺跡の紹介活動をしておられる「おやべふるさと学園」の多賀庸子会長から懇切な解説をしていただいた。続いて小矢部市埴生地区にある**小矢部ふるさと歴史館**を見学した。直径1mにも及ぶ巨大な丸柱や一端がY字形をした太さ50～60cmはある柱などを直接目にする事ができた。転勤族の私は、発掘当時たまたま富山にいてこの一大発見を見聞きし、出土品が川床の水に浸っていたことでほぼ原形を留めていたということがとても印象的だったが、今回改めてそれを目撃し感慨深かった。1万年に及ぶ縄文時代はまだまだ多くのナゾを秘めている。Y字の柱一つとっても、用途・目的等の解釈はまちまちだが、当日解説していただいた小矢部市の大野主査も、自らの夢をふくらます思いで熱心に語られており、それはこのあと訪問した遺跡資料館のどの担当者にも相通じた。

次に金沢市の**チカモリ遺跡公園**を訪れた。この遺跡では周辺の市街化にともなって昭和59年前後に発掘調査が行われ、直径80cm前後の巨木柱根が数多く出土した（縄文後～晩期）。巨木を縦に半分に割って円形に立て並べた環状木柱列跡とわかった。大小多数の木柱根は、隣接の建物（金沢市埋蔵文化財収蔵庫）の水槽に入れて保存されている。公園の一角には巨木柱のレプリカが建てられ、人々を太古へ誘っている。居合わせた解説員は「この公園の下は史跡チカモリ遺跡の中核だが、お金がかかるので未だ掘っていない。もしその時が来ればまたどんな発見があるか楽



桜町 JOMON パーク



小矢部ふるさと歴史館での研修

しみだ。」と将来への思いを語っていた。続いて、平成9年に開館した**金沢市埋蔵文化財センター**の一部がリニューアルして平成27年にオープンした「**金沢縄文ワールド**」を見学した。シンボル展示として史跡チカモリ遺跡の環状木柱列が再現されているほか、中屋サワ遺跡出土の豊富な木製品なども多数展示している。市周縁の遺跡群・貴重な歴史遺産を保護する中心的役割を担っているようだ。史跡の保存等については、どこでも住民や自治体が地域おこしも兼ねていろいろ知恵をしぼり、国の支援も得て積極的に進められているが、金沢市はひとときわ熱心のように、その整備ぶりには感心させられた。

桜町遺跡や史跡チカモリ遺跡で出土したような巨木の環状木柱列は北陸地方に集中しているといわれ、用途などが未解明のなか、あれこれ思いをめぐらす楽しみが残されている。これに使われているクリの木が小柄な縄文人2~3人でようやく丸抱えできるほどに育つまでじっと待つ息の長さ、それは2~3世代に及び計画性によって成り立つものであろう。縄文人の生きる知恵の深さ、精神性の高さをうかがわせるものである。争いを避け共同協力の縄文人の姿は今に学ぶべきところが多い。

次に向かったのが、野々市市の**史跡御経塚遺跡**である。ここも縄文後・晩期の集落跡だが、発見の端緒は次のとおりであったと聞く。「昭和29年、近くに住む中学生が小川で水をすくい上げて遊んでいるうちに石のヤジリ（石鏃）のようなものを見つけた。何とも解らず家に持ち帰って隠し持っていたが、担任の先生に見せたところ大変な発見と判明。これがきっかけで発掘調査が行われ、出土品の状況から1000年以上にわたる安定的な環状集落とのお墨付きを得、北陸を代表する縄文集落として国の指定史跡となった。」



史跡御経塚遺跡での研修

復原した遺跡公園の案内と、出土品の展示施設である**野々市市ふるさと歴史館**で説明にあたってくれた市村正則館長が、なんと当時の中学生その人であった。私たちの求めに応じて記念撮影におさまってくれた市村さんは筆者とほぼ同年輩かと思われるが、定年退職後、縁あるこの施設に呼ばれたのだという。私は、その話しぶりに一瞬、縄文人に出会ったような錯覚に陥った。

さて初日の旅の締めは、白山市の**末松廃寺史跡公園**である。史跡末松廃跡は飛鳥時代の寺院跡で大きな塔（三重ないし五重）の跡が土台の礎石とともに明確に残り、寺院の格の高さを示している。周縁はまさに発掘中で、予告なしの来訪にもかかわらず、夕刻の寒風のもと作業中の野々市市教育委員会の担当者が史跡の意義や歴史的背景などを丁寧に説明してくれたのは、とてもありがたかった。



末松廃寺史跡公園での研修

2日目は、小松市的那谷寺から加賀温泉の九谷焼窯跡展示館まで足を延ばした。あいにくの雨で傘を差しながらの見学となったが、**那谷寺**では奇岩と紅葉の景観を鑑賞し、**九谷焼窯跡展示館（史跡九谷磁器窯跡）**では加賀を代表する九谷焼の歴史と技術の奥深さを感じることができた。金沢市に戻って**石川県立歴史博物館**を自由見学、そして**金沢城公園（史跡金沢城跡）**の石垣巡りをする予定だったが、ますます雨脚が強くなったため石垣巡りを見送り、早めの帰途についた。史跡北代遺跡で活動する私たちにとって、今回の北陸を代表する縄文遺跡の見聞は、縄文大好き人間の太古への好奇心をあおり、また存分に満たしてくれる旅であった。天候による予定変更はあったものの、それなりの年輩者の一団が誰一人体調を崩すこともなく何よりであった。いま一つ、夜の会食での各人各様のカラオケが今回も健在なりと付記しておきたい。今後のボランティア活動のための英気を養った旅行でもあった。

(了)

北代縄文広場ホームページ

<http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/index.htm>

北代縄文通信 第46号：編集・発行 富山県教育委員会 埋蔵文化財センター